

# *Hildina* 試論

——シェットランド諸島で採録されたノーン語バラッド——

An Essay on *Hildina*, a Norn Ballad in Shetland

林 邦 彦

## 要 旨

ノーン語 (Norn) とは、8 世紀から 9 世紀にかけて、ブリテン島北部やその近辺の諸島に植民したノルウェー人ヴァイキングが当地にもたらした、その使用言語である古ノルド語 (Old Norse) に由来する言語で、特にオークニー、シェットランド両諸島では比較的長く用いられ、19 世紀末に消滅したとされる。その消滅前に採録されたノーン語の言語資料の一つに、通例、*Hildina* との作品名で呼ばれるバラッドがあり、その物語内容は、主人公の女性 *Hildina* と彼女を取り巻く二人の男達をめぐる三角関係を扱ったものであるが、本稿では、*Hildina* の物語素材をめぐる先行研究での指摘内容を整理した上で、*Hildina* の物語の特徴に焦点を当て、ノーン語と近縁関係にあるフェロー語で伝承されているバラッド作品群のうち、ノーン語の *Hildina* と比較的類似した物語内容を持つ作品と比較しながら、*Hildina* の物語の特徴をより浮き彫りにし、関連作品群の中に位置づけることを目指したい。

## キーワード

シェットランド諸島、ノーン語バラッド、*Hildina*、フェロー語バラッド、  
『トゥイストラムのバラッド』

## 1. ノーン語とは

現在、フェロー諸島で用いられているフェロー語や、アイスランドで用いられているアイスランド語は、いずれも 9 世紀にそれぞれの地に植民したノルウェー人ヴァイキングが当時使用していた古ノルド語 (Old

Norse) に由来する言語であるが、それに先立つ 8 世紀末から 9 世紀にかけて、後のフェロー諸島やアイスランドと同様に、ブリテン島北部やその周辺の諸島もノルウェー人ヴァイキングに植民され、彼らによってもたらされた古ノルド語に由来する言語が用いられることになった。これがノーン語 (Norn) と呼ばれる言語であり、特にオークニー、シェットランド両諸島では比較的長く用いられたが、口頭での使用に限られたと考えられ、決して多いとは言えない量の言語資料が採録されただけで、19 世紀後半に最後の母語話者が逝去したとされる<sup>1)</sup>。

## 2. ノーン語で遺されている言語資料

先述のように、ノーン語は基本的には口頭での使用に限られていたと思われる、採録・伝承されている言語資料は決して多いとは言えない。その言語資料には、聖書の「主の祈り」、諺、なぞなぞ、ナーサリーライムなどが見られるが、それに加え、35 詩節からなる一編のバラッドが含まれている。*Hildina*<sup>2)</sup>と呼ばれている作品である。

## 3. バラッド *Hildina*

*Hildina* と呼ばれるバラッド作品は、1774 年にスコットランド人の聖職者 George Low によって採録されたものである。オークニー、シェットランド両諸島の総合調査を命じられた George Low は、シェットランド諸島の Foula 島においてノーン語の使用実態を記録したが<sup>3)</sup>、そこで彼が 30 余りの語彙、新約聖書『マタイによる福音書』所収の「主の祈り」などとともに採取したのが、この *Hildina* と呼ばれるバラッド作品である。

George Low は Foula 島の高齢の農夫 William Henry からこのバラッドを聞き取ったが、George Low にはノーン語の知識はなく、音のみに頼る形の採録となった<sup>4)</sup>。

Lowが採録したこの*Hildina*と呼ばれるバラッドは、*A Tour Through the Islands of Orkney and Schetland [sic]*<sup>5)</sup>という彼の著作中に含まれているが、この著作が刊行されたのは彼の採録から約百年後の1879年のことであった（*Hildina*をめぐる部分は107–114頁。うち、*Hildina*の原文は108–112頁）。それまでの間に、このバラッドは、1805年にGeorge Barryによって、そして1838年にはPeter Andreas Munchによって、Lowの採録（手稿）に基づき、それぞれの著作中に採録される形で活字となっている<sup>6)</sup>。

その後、Lowによる採録から一世紀余り後に、ノルウェー人の言語学者Marius HægstadはLowの採録したものを分析し、言語的によりノーン語の本来の姿に近い形のヴァージョンの復元を試み、*Hildinakvadet, med utgreidung um det norske maal paa Shetland i eldre tid*<sup>7)</sup> (1900年) という著作にて発表した（*Hildina*の原文は14–20頁）。

そして、2016年、Bjarni Steintúnは、この*Hildina*を語学的側面から分析した修士論文<sup>8)</sup>中で、Hægstadのものに修正を加えた新たなテキストを発表している<sup>9)</sup>。本稿はこのSteintúnの版（Steintún 2016: 76–84）に基づくものである<sup>10)</sup>。

なお、このバラッドが採録されたのはシェットランド諸島であるが、物語の舞台はオークニー諸島とノルウェーで、オークニーの伯爵が主要登場人物の一人であり、一方、シェットランド諸島や同地ゆかりの人物は一切登場しないことから、このバラッドがもともとはオークニー諸島で成立したものであった可能性も指摘されている（Hnolt<sup>11)</sup>: 2004–16）。

### 3.1. *Hildina*の梗概とテキスト

採録された35詩節の*Hildina*の物語は、ところどころ内容が飛んでいると思しき箇所があり、そのままでは物語がややわかりにくいと思われる部分もあるが、当初の採録者のGeorge Lowは、インフォーマントのWilliam

Henryからこのバラッド作品の梗概も聞き取っており、以下のように記している：

An Earl of Orkney, in some of his rambles on the coast of Norway, saw and fell in love with the King's daughter of the country. As their passion happened to be reciprocal, he carried her off in her father's absence, who was engaged in war with some of his distant neighbours. On his return, he followed the fugitives to Orkney, accompanied by his army, to revenge on the Earl the rape of his daughter. On his arrival there, Hildina (which was her name), first spied him, and advised her now husband to go and attempt to pacify the King. He did so, and by his appearance and promise brought the King so over as to be satisfied with the match. This, however, was of no long standing, for as soon as the Earl's back was turned a courtier, called Hiluge, took great pains to change the King's mind, for it seems Hiluge had formerly hoped to succeed with the daughter himself. His project took, and the matter came to blows; the Earl is killed by Hiluge, who cut off his head and threw it at his lady, which, she says, vexed her even more than his death, that he should add cruelty to revenge. Upon the Earl's death, Hildina is forced to follow her father to Norway, and in a little time Hiluge makes his demand to have her in marriage of her father; he consents, and takes every method to persuade Hildina, who, with great reluctance, agrees upon condition that she is allowed to fill the wine at her wedding. This is easily permitted, and Hildina infuses a drug which soon throws the company into a dead sleep, and after ordering her father to be removed, set the house on fire. The flame soon rouses

Hiluge, who piteously cries for mercy, but the taunts he had bestowed at the death of the Earl of Orkney are now bitterly returned, and he is left to perish in the flames. (Low 1879: 113-4)

George Lowは、インフォーマントのWilliam Henryから聞き取った*Hildina*の梗概をこのように記しているが、実際、Lowが採録し、後にHægstad、さらにはSteintúnによって、より本来の姿に近い形に復元された35詩節からなるノーン語バラッド*Hildina*の原文は以下のとおりである(Steintún 2016: 76-84)。

1. Da vara Iarlin d'Orkneyar / for frinda sîn spirde ro, / whirðe an skildè meun our glasburyon burtaga, / or vannaro eidnar fuo.

オークニーの伯爵は自らの親族の者に意見を伺った。自分のかの乙女（ノルウェー王女Hildina）をガラスの（ように輝くほどの？）城市から連れ去り、困難な状況から解放してやるべきかどうかと。

2. “Tega du meun our glasburyon, / kere friendè min, / yamna meun eso vrildan stiente, / gede min vara to din”.

（オークニーの伯爵の親族の者の台詞と思われる）「我が親愛なる親族のお方よ、もしあなたがかの乙女をガラスの城市からお連れになれば、この世が続く限り、あなたは常に評判でありましょう。」

（この後、オークニーの伯爵はHildinaを自国に連れ去ったものと思われる。）

3. Yom keimir eullingin / fro liene, / burt asta vaar hon fruen Hildina, / hemi stumer stien.

王（ノルウェー王）が旅から帰ってきた。Hildina嬢はいなくなっており、継母が城に残されていた。

4. “Whar an yaar e londen, / ita kan sadnast wo: / an scal vara heindè

wo osta tre / sin reithin ridna dar fro”.

(ノルウェー王の台詞)「この者がどこの国にしようと、奴には根を張って立つところの最も高い木で首を括ってもらう。必ずだ。」

5. “Kem! to Orkneyar Iarlin, / vilda mien Sante Maunis, / i Orknian u bi an sian, / i lian far di ar”.

(Hildinaの継母、ないしはノルウェー王妃の台詞と思われる。この二人は同一人物か?)「もし、かの伯爵がオークニーへ行きましたら、聖 Maunis (聖マグヌス (Saint Magnus) ことオークニー伯 Magnus Erlendsson (1075-1115) のことか?) に護られることになりましょう。その後、彼は永遠にオークニーで暮らすことになります。あなた様は早くお発ちになることでございます。」

6. An gevè Drottnign / kednpuster onde kin, / firsane furu tworore / wo eder whitranè kidn.

彼は妃の頬を打った。涙が滝のように彼女の白い頬を流れ落ちた。

(ここで舞台はオークニーに移ると思われる。以下の会話がなされる前の時点で、既にノルウェー王はオークニーに到着していたものと思われる。)

7. In kimer in Iarlin / u klapa se Hildina onde kidn: / “Quirto vult doch fiegan vara, / moch or fy din?”

伯爵(オークニーの伯爵)は中へ入って来て、Hildinaの頬を軽く叩いた、「私とそなたの父と、どちらが死ぬ運命であってほしい?」

8. “Elde vild-a fiegan vara / fy min u alt sin ans namn u wo, / so min yach u ere min heve / Orkneyar lingè ro.

(Hildinaの台詞)「私は父と、その配下のすべての人達の方に死んでもらいたいと思います。こうして私と私の殿様とで、長い間オークニーを統治したいのでございます。」

9. Nu di skall taga dor yoch wo and / u ria dor to strandane nir, / u

yilsa fy minu avon blit, / an earni cumi i dora band”.

さあ、馬の準備をなさり、浜辺まで行かれ、私の父に、丁重過ぎるぐらいのご挨拶をなさるのです。父は喜んであなた様のお仲間になりましょう。」

（これを受け、オークニーの伯爵は、既にオークニーに到着していたノルウェー王のもとを訪れ、会話を始めたものと思われる。）

10. Nu swara an Konign / — so mege gak honon i muthi —: / “Whath ear di ho gane mier / i dautebuthe?”

すると王（ノルウェー王）はこう答えた——王には大層つらいことであつた——「そなた（オークニーの伯爵）は娘の代償として私に何をくれるつもりなのかね？」

11. “Tretti merkè vath ru godle, / da skall yach ger yo, / u allde vara sonnaliss, / so linge sin yach liva mo.”

（オークニーの伯爵の台詞）「30マルクを純金で差し上げます。私が生きております限り、あなた様は決して息子に欠くことはございません。」

12. Nu linge stug an Konign, / u linge wo an swo: / “Wordig vaar dogh mugè sonè, / yach askier fare moga so.

すると、王は長い間立ったまま、彼を見続けていた、「そなたは私の息子を束ねたほどにも匹敵する人物だ。そなたの望みどおりになるようにして進ぜよう。

12b<sup>12)</sup>. ……minde yach angan ufrien rost, / wath comm an mier to landa”.

……私はこの国で自分のもとへやって来るいかなる敵をも恐れはしない。」

13. Nu swara Hiluge / — Hera geve honon scam —: / “Taga di gild

firre Hildina, / sin yach skall lega dor fram.

すると、Hilugeは答えた——主が彼に恥辱をもたらされますよう——「あなた様（ノルウェー王のことと思われる）には、私がHildina様のためにお支払いするお代をお受け取りいただきとうございます。

14. Estin whaar u feurfetign, / a gonga kadn i sluge, / feurfetign, sin gonga / kadn i pluge.”

それは、薪束を引きずって進むことのできるすべての馬と四つ足の獣、ならびに鋤を引くことのできる四つ足の獣でございます。」

15. Nu stiender in Iarlin, / u linge wo an swo: / “Dese mo eke Orknear, / so linge san yach lava mo”.

この折、かの伯爵は彼（Hilugeのことか？）を長い間見てこう言った、「それは私の生きている間では、オークニー人にはとても賄えないものだ。」

16. “Nu eke tegar an sansot, / Koningn fyrin din, / u alt yach an Hilhugin / widn u garedin arar”.

（オークニーの伯爵の台詞と思われる）「あなた様（Hildina）の父王が取り決めに結んでくれることはありません。Hilugeが別の行動を取って勝ち取るでしょう。」

17. Nu swarar an frauna Hildina / u dem san idne i fro: / “Di slo dor a bardagana, / dar comme ov sin mo”.

この時、Hildina嬢がドアの中から答えた、「戦闘にお出になるので。起こるべきことが起こりましょう。」

18. Nu Iarlin an genger / i vadlin fram / u kadnar sina mien, / geven skeger i Orkneyan.

この時、伯爵は戦場へと進み出て来て、自らの臣下達を調べて回った。彼らはオークニーの従順な者達であった。



19. “Han u cummin / in u voder din, / frinde hans lever / velburne mien”.

(誰の台詞か不明)「かの男(ノルウェー王か?)があなた様の戦場へとやってまいりました。彼の身内の者(Hilgeか? Hilgeはノルウェー王の親族なのか?)が高貴な生まれの者達について来ております。」

20. Nu fruna Hildina, / on genger i vadlin fram: / “Fy di yera da ov mandum dora, / di spidla ikè mire man”.

この時、Hildina嬢は戦場へと進み出て来た、「お父様、寛容におなりください。卓越した方々を破滅に至らしめてはなりません。」

21. Nu sware an Hiluge / — Ere Go gev ana scam —: / “Gayer an Iarlin, frinde din, / an u fadlin in”.

すると、Hilugeはこう答えた——神様が彼に辱めをもたらされますよう——「そなたの親族のかの伯爵はすぐにも落命でございますな。」

22. Nu fac an Iarlin dahuge, / dar minde an engin gro, / an cast ans huge ei fong ednar, / u vax hedne mere meo.

そして、かの伯爵は死の一撃を蒙った——そこでは彼の治療ができる者はいなかった——Hilugeは伯爵の頭部をHildinaに向かって投げつけ、彼女の怒りは<sup>いやま</sup>弥増しに増した。

23. “Di lava mir gugna, / yift bal yagh fur o lande, / gipt mir nu fruan Hildina / vath godle u fastabande”.

(Hilugeの台詞)「私が豪胆に国を發ちましたら(国を發って豪胆に活躍し、王に利をもたらしたということか?), あなた様におかれましては、私に結婚をお認めいただけるとのお約束でございます。Hildina嬢をお嫁に頂戴いたしたく存じます。私の方からは純金を差し上げます。これは確固たる取り決めでございます。」

24. “Nu bill on heve da yalsguadnè borè, / u da kadn sina kloyn a bera,

/ do skall hon fruna Hildina / verka wo sino chelsina villya”.

(ノルウェー王の台詞)「これから、(Hildinaがお腹に宿している)伯爵の子どもが生まれ、その子が服を着られるようになったら、Hildinaには自らの意志で動いて(=決めて?)もらう。」

(遅くとも、次のスタンザに記されている出来事の前には、Hildinaは父王とともにノルウェーに戻っていたことになる。)

25. Hildina liger wo chaldona, / uo dukrar u grothè, / min du buga till bridlevsin, / hon lother u duka dogha.

Hildinaは天幕の中で横になっており、目は涙に曇っていた。彼らが(HildinaとHilugeの)結婚式の準備をしていた間に、彼女は飲み物に毒物を混ぜた。

26. Nu Hildina on askar / feyrin sien: / “Di gava mier livè ou skinka vin, / ou guida vin”.

そして、Hildinaは父王に、「私がワインを注ぎ、酌をするのをお許しいただきとうございます」と願い出た。

27. “Du ska skinka vin, / u guida vin, / tinka dogh eke wo Iarlin, / an gougha here din”.

(ノルウェー王の台詞)「そなたがワインを注ぎ、酌をしなさい。しかし、そなたの大事の殿であった、かの伯爵のことは考えるでないぞ。」

28. “Wath a skilde tinka wo Iarlin, / gougha herè min, / hien mindi yagh inga forlskona bera / fare kera fyrrin min”.

(Hildinaの台詞)「たとえ私が大事の殿だった伯爵のことを考えることがありましても、私の愛しの父上様に、毒の入った器をお出ししたりはいたしませんわ。」

29. Da gerde on fruna Hildina, / on bar se mien ot, / on sover in fast fy sin, / fy sin u quar sin sat.

すると、かのHildina嬢は例のミード酒（彼女が薬物を混ぜたもの。上記第25スタンザ参照）を提供した。彼女は父王とその場にいた者達をみな、深い眠りに陥らせた。

30. Da gerde un fruna Hildina, / on bar dim ur hadlin burt, / sien on laghdè gloug / 1 otsta jath a port.

Hildina嬢は彼ら（父王や一部の人々の体？）を広間から運び出した（引きずり出した？）。それから彼女は門のいちばん外側の入口に火を放った。

31. Nu iki visti an Hiluge, / ike ov till do, / eldin var commin 1 lutustor / u silkèsark ans smo.

この時、Hilugeは、上階の部屋の扉や彼の丈の短い絹製の襦袢に炎が回るまで、何も気付かなかった。

32. Nu lever en fram Hiluge / ————— / “Du kere da fraun Hildina, / du give mir live u gre”.

するとHilugeは飛び起きた。……「愛しのHildina嬢よ、私の命は奪わず、私に休戦を認めてほしい。」

33. “So mege u gouga gre / skall dogh swo, / skall lathì min heran / i bardagana fwo.

（Hildinaの台詞）「あなた様ご自身が戦場で我が殿様にお与えになったのと同じだけの長さの休戦をあなた様にお認めいたしましょう。」

34. Du tuchta da lide, undocht yach / swo etsa ans bugin bleo, / dogh casta ans huge i mit fung, / u vexe mir mire meo”.

私がかの方のお体から血が出るのを目の当たりにしましても、あなた様にとりましてはそれほどのことではなかったのでございましょう。あなた様はかの方の頭を私に向かって投げつけ、私の怒りは<sup>いや</sup>増しに増しました。」

35. Nu tachtè on heve fwelsko ans / bo vad mild u stien. / “Dogh skall aldè mirè Koningsens / vadne vilda mien”.

そして彼女は彼の遺灰を土と石で覆った、「もうあなた様もこれ以上、陛下の子どもに害を与えることはできませんわ。」

このように、LowがHenryから採録した*Hildina*の原文で実際に伝えられる内容と、同様に彼がHenryから聞いて自著に記した物語の概要とを比べてみると、*Hildina*の原文において明らかに物語が飛んでいると考えられる箇所、あるいは、Lowが記した概要中にはありながら原文にはないという要素が散見される一方、その逆のケースも見受けられる。それを受けて、Steintún (2016: 46) は、Lowに*Hildina*の原文および概要を語ったWilliam Henryは*Hildina*の物語の内容をきちんと理解していなかったのではないかと述べているが、それについてはここでは深入りせず、ここでは基本的にバラッドの原文で伝えられている内容に依拠し、原文において明らかに物語が飛んでいてそのままでは前後がつかない箇所に極力限り、Henryが語った梗概の内容で補う、という形を取ると、このバラッドの物語構造は、以下のようなものと判断できるであろう：

一人の伯爵が他国の王女と出会い、両者が相思相愛となり、伯爵が王女を自国へ連れ去る。王女の父王が追って来るも、王女のとりなしで一旦は父王と伯爵は和睦に至る。しかし、自らも王女に恋心を抱いていた王の廷臣の男によって王は翻意させられ、戦闘に発展し、廷臣の男は伯爵を殺す。王女は自国へ連れ戻される。廷臣の男は王に王女への求婚を申し出る。廷臣の望みは叶うが、結婚式の場で、当人に夫（伯爵）を殺された求婚相手（王女）による復讐に遭って落命する（復讐の手段は相手（廷臣）のいる建物への放火）。

### 3.2. *Hildina* の素材をめぐる先行研究での指摘

このノーン語バラッド *Hildina* の先行研究では、主として語学的な側面と物語素材がテーマとされてきたが、ここでは物語素材に関し、先行研究で指摘されてきた点を整理・確認したい。それらの点は以下のようにまとめられる：

① *Hildina* の登場人物のうち、Hiluge と *Hildina* の名は、アイスランドのサガ作品のうち、「古い時代のサガ (Fornaldarsögur)」と呼ばれるジャンルに属する『グリーズルの養い子イトウルギのサガ』(*Illuga saga Gríðarfóstra*) と呼ばれる作品に遡ると考えられる (Baranauskienė 2012<sup>13</sup>): 158)。また、フェロー語のバラッドには、この二人と類似した名前の主要登場人物を擁するバラッド『勇士イトウルジ』(*Kappin Illugi*, CCF18) が伝わる (主要登場人物の名はイトウルジ (Illugi) とヒルダ (Hilda)。ただし、Hilda は A ヴァージョンにおける表記で、B ヴァージョンでは Hildur (ヒルドゥル) と称される)。なお、ノルウェー語、およびデンマーク語では、フェロー語の『勇士イトウルジ』の A ヴァージョンの物語に類似した内容のバラッドが伝承されている。ただ、これらの作品はいずれも *Hildina* と同様、本国から連れ去られた一国の王女を連れ戻すという共通のテーマを有し、また、連れ去られた王女と連れ戻しに来る人物がそれぞれ、*Hildina* における当該人物 (Hildina と Hiluge) と類似した名前であるものの、*Hildina* では、王女を連れ去る伯爵が物語の主人公で、王女を連れ戻しに来る人物が悪役として描かれているのに対し、ここで挙げた他の作品ではいずれも、王女を連れ去るのは巨人女ないしは怪物女で、そのもとから王女を連れ戻して来る人物が英雄として扱われる形となっており、*Hildina* とは大きな違いが見られる (Hægstad 1901: 9–10; Fischer 2010<sup>14</sup>: 101; Baranauskienė 2012: 158–164)。

② *Hildina* の物語の前半部は、北欧神話を伝える複数の古アイスランド語のテキスト（スノリ・ストゥルルソン（Snorri Sturluson）の『スノリのエッタ（散文のエッタ）』（*Snorra Edda*）の第二部にあたる「詩語法」（*Skáldskaparmál*）や『ラグナル頌歌』（*Ragnarsdrápa*）など）において語られているヒャズニングの戦い（Hjaðningavíg）のエピソードとの類似が見られる（Hægstad 1901: 10-13; Hnolt 2004-16; Steintún 2016: 46）。このヒャズニングの戦いのエピソードの内容は以下のとおりである<sup>15)</sup>：

ホグニ（Hogni）王の留守中に、彼の娘のヒルドゥル（Hildr）は、ヘズイン・ヒャランダソン（Heðinn Hjarrandason : Hjarrandi（ヒャランディ）の息子 Heðinn（ヘズイン））という王に連れ去られる。ホグニはヒルドゥルが連れ去られたと聞くと、すぐさま軍勢を連れて彼女を探しに出かける。曲折の末、オークニー諸島のホイ島（Háey）までやって来ると、その地にヘズインが軍勢とともにいた。

ヒルドゥルはヘズインのために、父ホグニに和睦を申し出て首飾りを差し出す。しかし、ホグニは「拔身にされるたびに人を殺める」という剣を既に鞘から抜いており、彼らは戦闘を始める。それは終日続き、数多くの死者が出て、晩にヘズインとホグニは各々船に戻るが、ヒルドゥルは夜、戦場へ行き、斃れた者達を魔法で生き返らせ、生き返った戦士達は翌日再び戦闘を始め、それはラグナロク（*ragna-røkr* : 北欧神話における終末の日）まで続く。

③ *Hildina* の物語中には、スコットランドのバラッド作品にも見受けられるモチーフが存在する。例えば、*Hildina* では、女性主人公 *Hildina* の夫となっているオークニーの伯爵は、*Hildina* の父やその廷臣の *Hilge* ら

の側と戦うことになるが、「男性が、自分の恋人である女性の家族を相手に戦うことになり、この女性がその戦いに介入しなければならなくなる」というモチーフは、スコットランドのバラッド『ダグラス家の悲劇』(*Earl Brand*, Child 7) にも見受けられる。また、*Hildina*では、HilugeはHildinaの夫であるオークニーの伯爵を殺めると、その頭部をHildinaに向かって投げつけるが、「女性の恋人である男性の首が切断され、その首がその女性に向かって投げつけられる」というモチーフは『チャイルド・モーリス』(*Child Maurice*, Child 83A) のスコットランド版『ボブ・ノリス』(*Bob Norice*, Child 83C) にも見受けられる。さらに、*Hildina*では、夫を殺されたHildinaは殺害者であるHilgeに復讐する際、まず、薬物を入れた飲み物を提供してHilgeを含む関係者を眠らせた上で、命を救いたい者達の体をその場から移し、Hilgeのいる館に火を放ち、Hilgeを焼死させるという方法を取るが、スコットランドのバラッドの『ロード・ランドル』(*Lord Randal*, Child 12) や『トマスとマーガレット』(*Lord Thomas and Lady Margaret*, Child 260) などには、少々形は異なるが、「飲み物に薬物を混入させ、それを飲む男性を死に至らしめる」というモチーフが見受けられる (Fischer 2010: 99–101)。一方、Hægstad (1900: 26) や Baranauskienė (2012: 166–177) では、*Hildina*に見られる、「人を殺め、斬り落とした頭部を、殺された者の関係者に向かって投げつける」というモチーフについて、もともとは複数のアイルランド語の文学作品に見られるモチーフで、フェロー語の『マルグレータのバラッド』(*Margretu kvæði*, CCF77) にも取り入れられているとの指摘がなされている。

④大切な人物(男性)を奪われた女性が復讐のために建物に放火するのは、北欧の英雄伝説におけるグズルーン (Guðrún) を思わせる (Hnolt

2004-16; Steintún 2016: 46)。この伝説はドイツ語圏の叙事詩『ニーベルンゲンの歌』(*Nibelungenlied*)と題材を同じくするものであるが、北欧の英雄伝説におけるグズルーンの放火行為が、彼女の兄弟達を殺めた夫アトリ (Atli) への復讐であるのに対し、『ニーベルンゲンの歌』のクリエムヒルト (Kriemhilt) は、愛する夫ジーフリト (Sifrit) を殺した人物 (ハゲネ : Hagene) に復讐しようと、彼がいる建物に放火する (この時はハゲネは生き延びる) のであり、北欧の英雄伝説よりも『ニーベルンゲンの歌』の方が *Hildina* との類似性が高い (Steintún 2016: 46)。また、建物に放火して屋内の人物を死に至らしめるのは、『ニャールのサガ』(*Njáls saga*) などのアイスランド・サガ作品にも見られるモチーフである (Baranauskienė 2012: 182)。

⑤ *Hildina* の物語におけるオークニーの伯爵・Hiluge・*Hildina* の関係、およびこの三人の辿る道程が、プルタルコス (Plutarchus) の『モラリア』(*Moralia*) の中の「女性たちの勇敢」に記されている、ガラティアを舞台にしたカンマ (Kamma)<sup>16)</sup> の物語におけるシナトス (Sinatos)・シノリクス (Sinorix)・カンマの関係、およびこの三人の歩みと類似している (Baranauskienė 2012: 187-191)。カンマの物語は以下のとおりである<sup>17)</sup>：

ガラティアの領主の一人であるシナトスにはカンマという名の妻がおり、彼女はその若さと美貌、徳のゆえに多大な称賛、人気を得ていたが、シナトスの遠縁にあたり、同じガラティアの領主の一人であるシノリクスはカンマに惚れ込んでしまう。説得しても脅してもカンマを我が物にできないとわかると、シノリクスはシナトスを殺害し、カンマに求婚する。すると、当初からカンマの拒絶はそれほど激しいものではなく、やがてそれはさらに軟化してゆく (彼女の親族は権力を誇



るシノリクスの飲心を買うべく、彼女にシノリクスを受け入れるよう圧力をかけたりもしていた)。結局、カンマは折れる形となり、彼女はシノリクスを神前へ連れて行くと、牛乳と蜂蜜の入った飲み物をシノリクスに勧め、残りは彼女自身が飲んだが、その飲物には事前に毒が仕込んであった。彼が飲んだのを確かめてから、カンマは神前へ行き、シナトスが殺されて以来、自分が今まで生きてきたのはこの日のため、ただ正義が果たされることに喜びを感じている、自分は夫のもとへ行き、シノリクスの親族は、結婚式の代わりに彼の墓の用意をしてくれるだろうと語る。シノリクスは生にしがみつこうとするも、結局は落命し、カンマはシノリクスの死を耳にすると、喜んで息絶える。

⑥本作の物語の前半部分はフェロー語の『グリンマルのバラッド』(*Grimmars kvæði*, CCF51)とも類似が見られる。『グリンマルのバラッド』では、ノヴゴロド (Garðaríki)<sup>18)</sup>の王女ヒルダ (Hilda) が父王グリンマル (Grimmar) の留守中にイングランド王ハラルドゥル (Haraldur) に誘拐される。ヒルダはハラルドゥルと結ばれ、三人の子どもを産む。グリンマル王はハラルドゥルに対する復讐を画策し、ハラルドゥルにミード酒を飲ませ、彼がいる館に火を放ち、ハラルドゥルとその息子二人 (長男と次男) を焼死させる。ただ、*Hildina* では王女の夫を殺すのが王女の父王の廷臣であるのに対し、『グリンマルのバラッド』では、王女の夫を殺すのは王女の父王自身であり、また、父王が王女の夫を殺すまでの段階で戦闘は発生しない。一方、バラッド *Hildina* は、男性ではなく女性である Hildina が自ら仇討ちをするという点で、スカンディナヴィア圏のバラッドの中で特異な位置を占める (Fischer 2010: 101-2; Baranauskienė 2012: 160; Steintún 2016: 46)。

*Hildina*の物語素材については、先行研究ではこのような点が指摘されている。しかし、これら先行研究における指摘のうち、③と④は、*Hildina*の物語のごく一部分にあたるモチーフの由来をめぐるものに過ぎず、①と②、⑤、⑥はまとまった1エピソードの由来に関するものであるが、①と②については物語の前半部をめぐるもので、⑤については、ほとんど物語の後半部分のみに該当するもので、しかも、⑤に関して言えば、プルタルコスの著作で知られるカンマの物語は、ルネサンス期以降、西洋で大いにもてはやされ、いくつもの文学作品に題材を提供したことはよく知られているが<sup>19)</sup>、オークニー諸島やシェットランド諸島のような離島にもこの物語は本当に伝播していたのか、少々疑問が残る。また、⑥については、*Hildina*との類似が指摘された『グリーンマルのバラッド』の場合、特に前半部分は*Hildina*に描かれた事の成り行きと酷似しており、復讐の相手がいる館に火を放ち、相手を焼死させるというモチーフも共通しているが、その復讐は王女を攫った相手に対して父王が行っているものであり、復讐の方法は*Hildina*のケースと同じでも、それが物語中で果たす役割が異なっている。

そこで以下、本稿では、ゲルマン系北欧語圏のバラッドの中で、*Hildina*の作品全体としての物語構造と興味深い類似が見られながらも、*Hildina*との類似が先行研究では指摘されていない作品を一点取り上げ、*Hildina*の物語との比較を行い、ゲルマン系北欧語圏のバラッド作品群における*Hildina*の位置づけ、および*Hildina*と、以下で比較対象とする作品との間の関係性の有無について考察するための足掛かりとしたい。既に述べたように、先行研究ではフェロー諸島に伝わるフェロー語のバラッド作品群のうち、三作品について、*Hildina*の内容との部分的な類似が指摘されているが（ヴァイキング時代、フェロー諸島とシェットランド諸島は強いつながりがあったとされ<sup>20)</sup>、また、フェロー諸島では当時から現在に至るまで、ノー

ン語と近親関係にある言語が用いられている), 以下に取り上げる作品は, フェロー語のバラッドのうち, いわゆるトリスタンとイゾルデの物語に題材を取った『トゥイストラムのバラッド』(*Tístrams kvæði*, CCF 110)<sup>21)</sup>と呼ばれる作品である。

古典的なトリスタンとイゾルデの物語の基本的な要素は以下のとおりである：

〈主要登場人物〉 トリスタン, イゾルデ, マルケ王

〈物語〉 トリスタンはコーンウォールのマルケ王の甥。トリスタンはマルケ王の妃としてアイルランド王女イゾルデを獲得するべくアイルランドに向かい, アイルランド王は娘のイゾルデをマルケ王に娶らせることを認めてくれるが, 帰りの船上でトリスタンとイゾルデは一緒に娯楽を飲んだために相思相愛の関係に陥り, コーンウォールへの帰国後は, 二人はマルケ王の目を盗んで逢引きを重ねることとなる。やがて二人の関係はマルケ王の知るところとなり, トリスタンとイゾルデら二人とマルケ王との関係が悪化する (最後にはトリスタンとイゾルデはともに死を迎える)。

フェロー諸島に伝わる『トゥイストラムのバラッド』の物語内容は, 詳しくはこの後で述べるように, 上記の古典的なトリスタンとイゾルデの物語とは大きく異なるが, 相思相愛の主人公男女が, 自分達よりも上の立場の人間の存在がもとで引き裂かれ, 男女とも死を迎える点は, 古典的なトリスタン物語と変わらない。

### 3.3. *Hildina* と『トゥイストラムのバラッド』

フェロー語のバラッド作品には, 同じ作品についていくつものヴァージ

ジョンが採録、伝承されているケースもあるが、この『トゥイストラムのバラッド』については、伝承されているのは1848年に採録された、37スタンザからなる1ヴァージョンのみである。

### 3.3.1. 『トゥイストラムのバラッド』の梗概

トゥイストラム (Tistram: トリスタンに該当) とウイスイン (Ísin: イゾルデに該当) は相思相愛の仲であったが、トゥイストラムの両親は彼をウイスインから引き離す具体的な方法について話し合い (両親がトゥイストラムをウイスインから引き離そうとした理由、およびトゥイストラムとウイスインのこの時点での居住地は明示されず)、トゥイストラムの母は、トゥイストラムをフランス王の娘と結婚させることに加え、もしトゥイストラムがその結婚を拒むようであれば、彼を亡き者にすることを提案し、トゥイストラムは、「もしトゥイストラムがフランス王女との結婚を拒むようであれば、トゥイストラムを処刑して欲しい」との内容が書かれた手紙を持たされ、随行者達とフランスへ向かう。トゥイストラムは出発前にウイスインと会い、必ず戻って来ると約束する。

トゥイストラムはフランスに着くと、同地の王に面会し、手紙を渡す。それを読んだ王は、求婚者が来たことを娘に知らせるが、トゥイストラムは王女との結婚を拒み、絞首刑に処される。

トゥイストラムの随行者達は国へ戻る。トゥイストラムが処刑されたことを知ったウイスインはフランスへ赴き、王宮に火を放ち、女性も子どもも含めて死に至らしめる。私が何をしたのかと訊くフランス王に対し、トゥイストラムの命を奪ったからだと答えるウイスイン。それから彼女はトゥイストラムが吊るされている絞首台のところへ向かい、彼を降ろして地面に横たえ、自らも息絶える。

### 3.3.2. *Hildina*と『トゥイストラムのバラッド』との比較

#### 3.3.2.1. *Hildina*と『トゥイストラムのバラッド』の相違点

*Hildina*と『トゥイストラムのバラッド』の物語の間では以下の相違が見られる：

① *Hildina*では主人公の女性と相思相愛になる相手の男性が女性の自国の人間ではない。一方、『トゥイストラムのバラッド』では、主人公の男女は物語の最初の段階から同一の場所に居住し、既に相思相愛の関係にあるという設定だが、二人がそのような関係となるに至った経緯は記されず、二人がもともと同一国の出身かどうか不明である。

② *Hildina*では、主人公男女の上の立場の人物である、女性の父ノルウェー王が、一旦は二人の結婚に納得する（しかし、後にその廷臣によって翻意させられる）。

③ *Hildina*では、主人公の男性が殺される場面に妻も居合わせる。

④ *Hildina*では、主人公の女性にとって、復讐の相手となる人物（すなわち自分の大切な男性を殺した者）が、父王の廷臣という、自国の身近な人間である。

⑤ *Hildina*では主人公の女性が復讐する相手（Hiluge）は、その者自身の意志によって彼女の大切な男性を殺害した者であるのに対し、『トゥイストラムのバラッド』では、主人公女性の復讐相手（フランス王）が彼女の大切な男性（トゥイストラム）を殺害したのは、あくまでトゥイストラムの両親から依頼を受けてのことで、もともとフランス王にトゥイス

トラム殺害の意図があったとの記述はない。また、主人公女性の大切な男性の殺害を指示した人物（トゥイストラムの両親）が彼女の復讐対象となった旨の記述もなく、『トゥイストラムのバラッド』では、あくまで主人公女性の大切な男性の殺害を指示されて実行した側の人物（その周囲の者達も含まれる）だけが、主人公女性の復讐対象となっている。

⑥ *Hildina* では主人公の女性が復讐を遂げた後、少なくとも彼女の死を示す記述はない。

3.3.2.2. *Hildina* と『トゥイストラムのバラッド』の共通点および類似点  
一方、この二つの作品は、以下に記す物語の形が共通している：

身分が高く若い相思相愛の男女がいるものの、この二人の間が、自分達より上の立場の人間によって引き裂かれ、男性の方が死に至らしめられる。男性を失って悲しむ女性は、男性を死に至らしめた者本人に復讐するべく、その者がいる館に火を放ち、焼死させる、その際、焼死する者が女性に恨み言を言うか、あるいは命乞いをし、それに対して女性は相手が自分にしたこと（相手が自分の最愛の男性を亡き者にしたこと）を指摘する。

既述のように、*Hildina* では主人公の女性が復讐する相手は、その者自身の意志によって彼女の大切な男性を殺害した者であるのに対し、『トゥイストラムのバラッド』では、主人公女性の復讐相手となるのは、最初に主人公女性の大切な男性の殺害を意図した者ではなく、あくまでその最初に意図した者から依頼を受けて男性の殺害を実行した者である、という違いはあるが、主人公女性の最愛の男性に直接手を下し、そして最後に女性

に復讐されるのは、いずれも女性の上の立場の人物の好意に浴している者であるか、あるいは女性の上の立場の人物の意を受けた者（いずれも男性）という点では類似性が認められよう。

また、両作品は、物語が海を渡っての移動を含む点も共通している。

### 3.3.2.3. *Hildina*と『トゥイストラムのバラッド』の比較のまとめ

この『トゥイストラムのバラッド』と*Hildina*の間の直接の影響関係の有無、あるいは両作品が同一作品から直接的に題材を取ったりしているかどうかはわからない。また、管見の限り、『トゥイストラムのバラッド』と*Hildina*の物語の類似、あるいは両者の間の関係性の有無について論じた先行研究は見られない。

しかし、*Hildina*の冒頭では、『トゥイストラムのバラッド』にはない、主人公男女が相思相愛の関係に至る経緯が記されているという点こそあるものの、先にも記した、作品の物語全体としての構造、すなわち、

身分が高く若い相思相愛の男女がいるものの、この二人の間が、自分達より上の立場の人間によって引き裂かれ、男性の方が死に至らしめられる。男性を失って悲しむ女性は、男性を死に至らしめた者本人に復讐するべく、その者がいる館に火を放ち、焼死させる、その際、焼死する者が女性に恨み言を言うか、あるいは命乞いをし、それに対して女性は相手が自分にしたこと（相手が自分の最愛の男性を亡き者にしたこと）を指摘する。

という基本構造をそっくりそのまま*Hildina*と共有しているという点は、先に記した*Hildina*に関する先行研究において、*Hildina*の物語と類似の要素を持つ点を指摘されているどの作品にも見られない点と言えよう。その中でも特に、「相思相愛の関係にあった男性を上立場の者の意を受けた

人間に殺された女性が、物語の後半において、殺した者に復讐するべく、その者がいる館に火を放ち、焼死させる。その際、焼死する者が女性に恨み言を言うか、あるいは命乞いをし、それに対して女性は相手が自分にしたことを指摘する」という点については、*Hildina*と『トゥイストラムのバラッド』の間で明確な共通性が見られる。Baranauskienė (2012: 160) や Steintún (2016: 46) は、「男性ではなく女性である *Hildina* が仇討ちをする」という点で、バラッド *Hildina* はスカンディナヴィア圏のバラッドの中で特異な位置を占める」と述べているが、この「男性ではなく女性が仇討ちをする」という点は、少なくとも『トゥイストラムのバラッド』には *Hildina* と共通して見られる要素である。

#### 4. 結 語

ここまで本稿では、アイスランド語やフェロー語と同じくノルウェー人ヴァイキングが使用していた古ノルド語に由来し、オークニー諸島やシェットランド諸島で長く使用されたノーン語の残された言語資料のうち、バラッドとしては唯一のものである *Hildina* と呼ばれる作品について、その物語内容を確認した上で、トリスタンとイゾルデの物語を扱ったフェロー語バラッド『トゥイストラムのバラッド』の物語との比較を行い、両作品が共通の物語構造を持つことが確認できた。今後、さらにフェロー語作品を中心とした北欧語圏の多数のバラッド作品へと調査の手を広げ、*Hildina* と『トゥイストラムのバラッド』の関係性の有無についてさらに考察を深めつつ、北欧語圏のバラッド作品群における *Hildina* の位置づけをよりはっきりさせることを目指したい。

#### 付 記

本稿は、日本カレドニア学会2018年度第二回研究会（於 拓殖大学文京キ



ャンパス、2019年 1 月 26 日)における発表原稿に加筆修正を施したものである。貴重なお意見をくださった方々に感謝申し上げたい。

## 註

- 1) Rendboe, Laurits (1987) *Det gamle shetlandske sprog. George Low's ordliste fra 1774*. NOWELLE Supplement, 3. Odense: Odense University Press, 6; 清水誠 (2012) ゲルマン語入門, 三省堂, 112 頁。
- 2) Hildina とは本作の女性主人公の名前であるが、ノーン語の固有名詞の発音の推定や再建には限界があり、本稿では以下、ノーン語作品 *Hildina* については、作品名、登場人物名とも欧文表記のみを記し、他言語の作品については、原則として、作品名は初出の際には邦題と括弧付きの欧文表記を併記し、二度目以降は邦題のみを記す形とし、作中の登場人物名に関しても、初出時に限り、片仮名表記と括弧付きの欧文表記を併記し、二度目以降は片仮名表記のみを記載する (ただし、ギリシャ語作品については註 16 を参照)。
- 3) 清水 (2012: 112-3)。なお、George Low がシェットランド諸島の総合調査を行うに至る経緯についてのさらなる詳細は、Low, George (1879) *A tour through the islands of Orkney and Schetland, containing hints relative to their ancient, modern and natural history collected in 1774*, with illustrations from drawings by the author, and with an introduction by Joseph Anderson. Kirkwall: William Peace & Son 所収の Joseph Anderson による Introduction (xiii-lxiv) を、Low が同地にて記録したノーン語の使用実態については、詳しくは同書 104 頁以下を参照。なお、同書が刊行されたのは Low の調査の約 100 年後である。
- 4) Low (1879: 107) ; Hægstad, Marius (1900) *Hildinakvadet, med utgreiding um det norske mål på Shetland i eldre tid*. Christiania: I Kommission hos Jacob Dybwad, 11; Hægstad, Marius (1901) “Hildinakvadet”. *Syn og Segn* 7: 1-14, 2.
- 5) 詳しくは註 3 を参照。
- 6) Barry, George (1805) *The History of the Orkney Islands, in which is comprehended an account of their present as well as their ancient state, together with the advantages they possess for several branches of industry and the means by which they may be improved*. Edinburgh: Archibald Constable and Company; London: Longman Hurst Rels & Orme: 484-490; Munch,

P.A. (1838) “Geographiske og historiske Notiser om Orknøerne og Hetland”.  
*Samlinger til det norske Folks Sprog og Historie* 6: 1, 79–133, 120–126.

- 7) 註 4 を参照。
- 8) Steintún, Bjarni (2016) *The Hildina Ballad. A linguistic analysis of the case system*. Universitetet i Bergen. Institutt for lingvistiske, litterære og estetiske studier. NOFI 350 Mastergradsoppgave i norrøn filologi vårsemester 2016.  
<http://bora.uib.no/handle/1956/12356>
- 9) Steintún (2016) では、Steintún による *Hildina* の transcription は 58–64 頁に、normalize された句読点を付して修正されたテキストは 76–84 頁に掲載。本稿は後者に依拠している。
- 10) 註 8 を参照。
- 11) ノーン語の研究サイト <http://nornlanguage.x10.mx/> を指す。本サイトでは消滅までに採録されたノーン語の多岐にわたる言語資料が比較的豊富に掲載されており、ノーン語の文法的な側面も詳述されている。本稿で取り上げているバラッド *Hildina* については、Low による採録テキストと Hægstad によるテキストが併記され ([http://nornlanguage.x10.mx/shet\\_txt\\_hild.htm](http://nornlanguage.x10.mx/shet_txt_hild.htm))、本作の物語内容や素材、語学的側面について論じられている ([http://nornlanguage.x10.mx/index.php?shet\\_hild](http://nornlanguage.x10.mx/index.php?shet_hild))。これらのうち、本作の物語素材に関する当サイトにおける指摘については本稿本文で後述するが、本サイトの著者については明示されておらず、2020 年 3 月参照時点では、メインサイトの下部に “©2006–2016 Hnolt” と記されているのみである。これに則り、以下、本稿では本サイトの記述に言及する際には、本サイトの著作者について Hnolt (2006–2016) と記す。
- 12) *Hildina* のテキストとして本稿で使用している版が掲載された Steintún (2016) の 135–140 頁には、Low の採録による手稿のファクシミリの写真が掲載されているが、この Steintún の版における第 12 スタンザと第 12b スタンザの詩行の内容は、Low の手稿では、まとめて第 12 スタンザとして 5 行にわたって記され、その後には第 13 スタンザが続き、第 35 スタンザまで採録されているが、第 12 スタンザの 5 行目の末尾のところに、Low 自らによる “This verse seems to be part of an intermediate stanza, probably to be placed between these marked 12 & 13.” との註釈が付けられている (Steintún 2016: 137)。Hægstad によるテキストでも、第 12 スタンザは「12」と「12b」に分けられているが (Hægstad 1900: 16)、Hægstad, Steintún のいずれの版でも、他にはそのように複数のスタンザに分けられている詩節はなく、本作が事実上 36 詩節からなる形でテキストが掲載されている。

- 13) Baranauskienė, Rasa (2012) *Celtic and Scandinavian language and cultural contacts during the Viking Age*. Doctoral dissertation. Vilnius University. <https://epublications.vu.lt/object/elaba:1910296/1910296.pdf>
- 14) Fischer, Frances J. (2010) "'Hildina' - A Norn Ballad in Shetland". *Scottish Studies* 35: 92–105.
- 15) 以下に記すヒャズニングの戦いのエピソードの内容は、『スノリのエッダ』の第二部に当たる『詩語法』の内容に基づく。『スノリのエッダ』の原文については Snorri Sturluson: *Edda udgiven af Finnur Jónsson*, anden udgave. København: G. E. G. Gads Forlag, 1926 を使用。このうち、『詩語法』は 68–147 頁（ヒャズニングの戦いを伝える部分は 118–9 頁）。
- 16) 作者名 プルタルコス、および作品名『モラリア』の欧文表記はラテン文字表記を使用。『モラリア』の作中人物の欧文表記については、下記邦訳巻末の固有名詞索引に記載のラテン文字表記を使用：プルタルコス[著]、松本仁助訳『モラリア 3』西洋古典叢書 G087、京都大学学術出版会、2015 年。なお、「女性たちの勇敢」の掲載頁は 323–84 頁、そのうち、カンマの物語は 368–9 頁。また、巻末の固有名詞索引のうち、カンマの物語の登場人物名のラテン文字表記の掲載頁は 4–6 頁。
- 17) カンマの物語については、註 16 記載の邦訳の当該頁（368–9 頁）を参照。
- 18) Garðaríki という固有名について、*Føroysk-ensk orðabók = Faroese-English dictionary : with Faroese folk-lore and proverbs and a section by Professor W.B. Lockwood on Faroese pronunciation. Compiled by G.V.C. Young and Cynthia R. Clewer*. Peel, Isle of Man: Mansk-Svenska Pub. Co.; Tórshavn, Føroyar: Distributed by Føroya Skulabokagrunnar, 1985 には、“the Russian kingdom round Novgorod”とあり（167 頁）、本稿本文では「ノヴゴロド」とした。
- 19) Bartera, Salvador (2011). “Review of Carlo Caruso and Andrew Laird (eds.) , *Italy and the Classical Tradition: Language, Thought and Poetry 1300–1600* (London: Gerald Duckworth & Co., Ltd., 2009)”. *International Journal of the Classical Tradition* 18 (1) : 138–144: 140.
- 20) Gísli Sigurðsson (1988) *Gaelic Influence in Iceland. Historical and Literary Contacts. A Survey of Research*. Studia Islandica 46. Reykjavík: Bókauktgáfa menningarsjóðs: 11; Hansen, Steffen Stummann (1996) “Aspects of Viking society in Shetland and the Faroe Islands”. In: Waugh, Doreen J. (ed) *Shetlands Northern Links. Language & History*, 117–135: 117. Edinburgh: Scottish Society for Northern Studies.
- 21) テキストは、*Tístrams táttur*. In: Djurhuus, N. (ed.) *Føroya Kvæði. Corpus*

*Carminum Færoensium* 5. Copenhagen: Akademisk Forlag, 1968, 283–5 を使用。

主要参考文献（註で挙げたものは除く。すべて二次資料）

- Barnes, Michael (2010) “The Study of Norn”. In: ed.: Millar, R. M. 2010: *Northern Lights, Northern Words. Selected Papers from the FRLSU Conference, Kirkwall 2009–The languages of Scotland and Ulster, vol. 2.* <http://www.abdn.ac.uk/pfrlsu/volumes/vol2/>
- Chesnutt, Michael and Larsen, Kaj (1996) *History, Manuscripts, Indexes. Føroya Kvæði. Corpus Carminum Færoensium* 7. Universitets-Jubilæets Danske Samfunds Skriftserie 540. Copenhagen: C.A. Reitzels Forlag.
- Conroy, Patricia L. (1985) “Faroese Ballads”. In: Joseph R. Strayer (ed.) *Dictionary of the Middle Ages* 5, 15–17. New York: Scribner, 1985.
- Driscoll, M. J. (2011) “Arthurian Ballads, *rimur*, Chapbooks and Folktales”. In: Marianne E. Kalinke (ed.) *The Arthur of the North. The Arthurian Legend in the Norse and Rus’ Realms*, 168–195. Cardiff: University of Wales Press.
- Gíslí Brynjúlfsson (1878) “Danske, islandske og færøiske Kvad om Tristram og Isold”. In: *Saga af Tristram ok Ísönd samt Möttuls saga*, 327–70. Kjöbenhavn (Copenhagen): Thieles Bogtrykkeri.
- Lindqvist, Christer (2000) “Das Shetlandnorn innerhalb der Skandinavien. Mit einer Untersuchung zum bestimmten Artikel”. In: ed.: Paul, F. Grage, J. Heizmann, W.: *Arbeiten zur Skandinavistik: 13. Arbeitstagung der Deutschsprachigen Skandinavistik, 29.7.–3.8.1997 in Lysebu (Oslo)*. Frankfurt: Peter Lang.